

自閉性障害児の非慣用的言語行動に対する保護者の理解

Parents' Understanding of Unconventional Verbal Behavior of Children with Autistic Disorders

廣澤 満之

Mitsuyuki HIROSAWA

Abstract

It is important for adults to recognize the functions of unconventional verbal behavior of children with autistic disorders and use them for effective communication. This study examines 13 parents of children with autistic disorders to analyze their understanding of such behavior. Previous studies classify unconventional verbal behavior into three types (immediate echolalia, delayed echolalia, and incessant questioning) and four functional groups (non-focus, turn-taking, cognitive, and intention). We asked the participants two questions regarding the meaningfulness of and their response strategies for unconventional verbal behavior. The results showed that one function was recognized as being meaningless and warranting restraint. In contrast, the other functions were used to formulate communicative strategies. In this study, parents' understanding of unconventional verbal behavior is discussed from the perspective of intelligence quotient (IQ) and calendar age (CA) of the children.

Keywords : Unconventional verbal behavior, Echolalia, Autistic disorders, Parents' understanding

キーワード : 非慣用的言語行動、エコラリア、自閉性障害、関わり手の理解

1. 問題と目的

自閉性障害は、①対人的相互反応の質的障害、②コミュニケーションの質的障害、③常同行動・儀式的行動の3つの領域によって特徴付けられる障害である (APA, 2002)。Kanner (1943) は、初めて自閉症を報告した13例のケースにおいて、これらの特徴について詳細な報告を行っている。その中でも②コミュニケーションの質的障害については、エコラリアについて多くの記述がされている。それによると、エコラリアには、表面的な意味とは異なる“個人的な意味 (Private meaning)” が込められる。そのため、表面的な意味とは異なる意味が込め

られた場合、発話に込められた自閉性障害児の意図を聞き手が“意図が込められた発話”として捉える必要がある。通常言語によるやりとりの場合、発話者が込めた意図は、多くの場合、その意図のまま聞き手に伝わる。しかしながら、エコラリアの場合、意図を捉えることができず二者間コミュニケーションが成立しない可能性が高いのである。

Prizant & Rydell (1993) は、自閉性障害児の発話のうち、エコラリアのように一般的な他者には通じない（慣用性を持たない）が“個人的な意味”が込められた発話を“非慣用的言語行動 (unconventional verbal behavior)”として定義している。非慣用的言語行動には、①即時性エコラリア (immediate echolalia)、②遅延性エコラリア (delayed echolalia)、③保続的発話 (perseverative speech)、④絶え間ない質問 (incessant questioning) が含まれている。また、非慣用的言語行動には様々な機能があることが明らかとなっており、即時性エコラリアには7つの機能 (Prizant & Duchan, 1981)、遅延性エコラリアには14の機能 (Prizant & Rydell, 1984) がある。

非慣用的言語行動の特徴は、“個人的な意味”が込められるため、通常言語と比べて他者とのすれ違いが生じやすいことである。たとえば、多くの自閉性障害児はCMの台詞をくり返すことを好むが、この行動は、関わり手によっては意味がないと捉えられる可能性がある。一方で、ある関わり手にとってはCMの台詞を介して他者と言葉遊びをしたいと理解される可能性もある。すなわち、関わり手が非慣用的言語行動に意味を見出すことが、自閉性障害児と関わり手がコミュニケーションを継続できるかということに繋がるのである。

金子 (2004) が、「オウム返しについては、同じことばを真似て繰り返すのみでなく対話的な意味を持つことがあり、子どもの思いや気持ちを読み取ることが重要であり、その後のことばの発達を促すことにもつながるのではないかと述べているように、関わり手側が非慣用的言語行動をコミュニケーション手段として有効であるとして“意味づけ”ることが重要なポイントになると指摘している。特に幼児期といった発達初期は、様々な能力の基礎ができあがる時期である。その発達初期の自閉性障害児の主たる養育者は保護者である場合が多い。すなわち、保護者が、非慣用的言語行動に意味づけをすることは、自閉性障害児のその後の発達に影響を与える可能性があると考えられるのである。

神野 (2004) は、そもそも非慣用的言語行動のような発話は、一般的な社会の価値観からは理解されにくく、周囲の他者はそのような行動をやめるように注意・叱責することもあると述べている。そして、そのような周囲の対応によって、自閉性障害児は自分の行動が周囲に受け入れられていないと感じるようになり、ひいては様々な行動障害に派生する可能性があることを指摘している。このような指摘にあるように、そもそも非慣用的言語行動は、周囲の他者にとっては受け入れがたい側面を持っている。たとえば、社会的な場面（公共交通機関、近所のお店など）において、子どもがCMの台詞を大きな声で口ずさんでいるといった場合、保護者は年齢に不相応な行動をしている子どもが社会の目にさらされる経験をするようになる。このような経験によって、非慣用的言語行動にコミュニケーション手段としての積極的な意味づけ

を行ったとしても、実際には抑制していくといった対応をせざるを得ない状況も生まれると考えられる。特に、より生活年齢の高い自閉性障害児の場合は、非慣用的言語行動を話すことが、年齢不相応な印象を生み、周囲からの否定的な理解につながる可能性があると考えられる。

そこで、本研究では非慣用的言語行動に対して、自閉性障害児の保護者はどのような意味づけを行い、どのような対応を行っているのかという点を明らかにすることを目的とした。また、生活年齢や非慣用的言語行動の発達段階に伴い、保護者はどのようなニーズをもち、どのような理解・対応を行っているのかということ併せて明らかにすることで、非慣用的言語行動を多用する自閉性障害児の保護者に対する支援のあり方を検討する。

2. 方法

2. 1 参加者

参加者は、広汎性発達障害児（自閉性障害・アスペルガー障害）を養育する13名の保護者であった。それぞれの子どものプロフィールについてはTable 1に示した。なお、調査前に全ての参加者に対して本調査の概要を伝え、同意書に署名を得た。

Table 1 対象児のプロフィール

| 名前 | 生活年齢 | 診断名 | IQ | 所属 |
|----|--------|----------|------|-------------|
| A | 11歳2ヶ月 | 自閉性障害 | 28* | 小学校（特別支援学校） |
| B | 12歳6ヶ月 | 自閉性障害 | <35 | 小学校（特別支援学校） |
| C | 13歳5ヶ月 | 自閉性障害 | <35 | 小学校（特別支援学校） |
| D | 13歳0ヶ月 | 広汎性発達障害 | 54* | 中学校（特別支援学級） |
| E | 6歳4ヶ月 | 自閉性障害 | 54* | 幼稚園 |
| F | 6歳1ヶ月 | 自閉性障害 | 60* | 保育所 |
| G | 9歳1ヶ月 | 自閉性障害 | 65* | 小学校（特別支援学級） |
| H | 13歳4ヶ月 | 自閉性障害 | 74 | 中学校 |
| I | 11歳8ヶ月 | 自閉性障害 | 76 | 中学校（特別支援学級） |
| J | 12歳7ヶ月 | 自閉性障害 | 85 | 中学校 |
| K | 13歳8ヶ月 | アスペルガー障害 | 89 | 中学校 |
| L | 3歳11ヶ月 | 自閉性障害 | 107* | 保育所 |
| M | 5歳6ヶ月 | 自閉性障害 | - | 保育所 |

注1. “IQ”の後の*は田中ビネー、その他はWISC-III

注2. M児は知能検査未測定、B・C児は療育手帳の等級から推定

注3. 診断名は保護者の申告による

2. 2 調査方法

参加者と個別に半構造化面接を行い、その会話をICレコーダーに記録した。面接時間は、1名の保護者あたり約1時間半であった。調査に先立ち倫理的配慮・同意書についての説明を行い、以下の順に質問を行った。①非慣用的言語行動の各機能群（後述）についての説明、②非慣用的言語行動の各機能群の有無・出現した時期・消失の有無について（本質問については、Hirosawa & Tanaka（2008）にて公表済み）、③非慣用的言語行動に対する“保護者の意味づけ”と“応答方略”の三点であった。面接後に、面接者と参加者の会話内容からトランスクリプトが作成された。

2. 3 調査項目

非慣用的言語行動は複数の種類と機能から構成される。先行研究（Prizant & Duchan, 1981; Prizant & Rydell, 1984; Rydell & Miranda, 1994; 佐藤, 2005）を参考にして、種類については、①即時性エコラリア、②遅延性エコラリア、③絶え間ない質問に分類した。機能については、①焦点不定群、②会話ターン充足機能群、③認知機能群、④意図伝達機能群に分類した。Table 2には各機能群の概要を示した。保護者に対しては、非慣用的言語行動の各種類・各機能群について、①保護者の意味づけ（「どのような意味があると思いますか？」）、②応答方略（「どのように返していますか？」）について尋ねた。なお、保護者に質問する際には、各種類・各機能群を適切に理解してもらうため図版を使用した（Fig. 1）。

ただし、【即時性エコラリア—意図伝達機能群】と【即時性エコラリア—遅延性エコラリア】に関しては、“①保護者の意味づけ”について質問を行わなかった。これは、意図伝達機能群の概要を保護者に説明する際に、「この場合、子どもが『はい』や『いいえ』などの意味を含めています」と説明するため、保護者が『はい』や『いいえ』といった意味づけを行っていることが前提とされているためであった。

Table 2 非慣用的言語行動の各機能群の概要

| 種類 | 機能群 | 機能の概要 |
|----------------------|------------|------------------------------------|
| 即時性エコラリア 遅延性エコラリア | 焦点不定群 | コミュニケーションの意図を持たず、自己刺激的な発話 |
| 即時性エコラリア 遅延性エコラリア | 会話ターン充足機能群 | 他者との間で会話のターンを充たすことを目的とされた発話 |
| 即時性エコラリア 遅延性エコラリア | 認知機能群 | 行動調整のために行われる発話、対人的指向性は無い |
| 即時性エコラリア 遅延性エコラリア | 意図伝達機能群 | 他者に何らかの意図を伝達するために行われる発話 |
| 絶え間ない質問 | 会話ターン充足機能群 | 他者に対して同じ質問を繰り返して、他者から同じ応答を求めるための発話 |

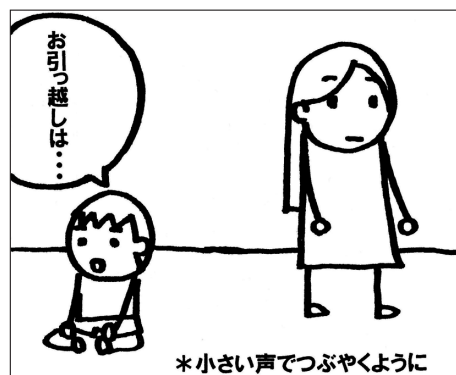


Fig. 1 本調査で使用された図版

2. 4 分析

“①保護者の意味づけ”の有無については、保護者が非慣用的言語行動に意味を見出しているかについて評定した。具体的には、「遊びの要素が多い気がします。こういう遊びをよくしていたので。【遅延性エコラリアー焦点不定群】」「自分の行動を言うことで調整している気がするんですよ。【即時性エコラリアー認知機能群】」といったように、保護者が何らかの意味を付与しているかどうかを基準とした。

“②応答方略”については、保護者が非慣用的言語行動に対してどのように対応しているかを明らかにするため、“(1)置換”などの抑制することに言及したスクリプト(例:「応えないようにしています」「正しい言葉に言い換えています」など)と“(2)コミュニケーション手段として利用”していることに言及したスクリプト(例:「積極的に応えています」「逆に質問したりします」など)に分類した。

さらに、“①保護者の意味づけ”と“②応答方略”について、保護者の非慣用的言語行動に対する理解を質的に分析するため、4つの事例を取り出した。これらの事例は、(1)非慣用的言語行動の発達段階と、(2)生活年齢の高低という2つの視点から選択した。

(1)非慣用的言語行動の発達段階で事例を選択した理由は、発達段階によって非慣用的言語行動に対する対応が異なっている可能性があるからである。たとえば、シンボル機能の高い非慣用的言語行動が多くを占める段階では、さらにシンボル機能が高い通常言語に置換するために非慣用的言語行動を抑制するといった対応が考えられるからである。したがって、非慣用的言語行動が発話の中心となっている事例と、通常言語が発話の中心であり非慣用的言語行動が少ない事例を比較した。

(2)生活年齢の高低で事例を選択した理由は、生活年齢の高低によって保護者が異なった対応をする可能性があるからである。たとえば、生活年齢が低いということは告知を受けて間もない時期であり、発達過程の中でも初期発達にあり、保護者が非慣用的言語行動に対する理解が深まる前であると考えられる。また、生活年齢が高いということは、告知からの期間も長く、子どもが学校などの社会生活も経験しており、その中で保護者が非慣用的言語行動に対する理解を既に形成していると考えられる。このように保護者の障害理解や社会生活との関連で対応に差が生じると考えたからである。

3. 結果

3. 1 各機能群に対する意味づけの有無

各種類・機能群に対する保護者の意味づけの有無については、Table 3に示した。それによると、ほとんどの種類・機能群の非慣用的言語行動に対して保護者は意味づけを行っていた。ただし、その中でも【遅延性エコラリアー焦点不定群】に関しては、9名中3名の保護者が意味づけを行っていなかった。具体的には、「意味は分かりませんが、音が入ってくるみたいです。 (G児)」「意味ないと思っているんですけど、ただ、耳に残った。(H児)」「意味はない

と思います。(M児)」といった回答を行っていた。

Table 3 各機能群の発話に対する意味づけの有無と応答方略

| 種類 | 機能群 | 意味づけあり | 応答方略 | | 母数 |
|----------|------------|--------|-------|-----------|----|
| | | | 置換・軽減 | コミュニケーション | |
| 即時性エコラリア | 焦点不定群 | 1 | 0 | 1 | 1 |
| 遅延性エコラリア | | 9 (3) | 8 | 8 | 12 |
| 即時性エコラリア | 会話ターン充足機能群 | 9 (1) | 2 | 8 | 10 |
| 遅延性エコラリア | | 8 | 3 | 5 | 8 |
| 即時性エコラリア | 認知機能群 | 2 | 0 | 1 | 2 |
| 遅延性エコラリア | | 2 | 1 | 1 | 2 |
| 即時性エコラリア | 意図伝達機能群 | - | 5 | 8 | 10 |
| 遅延性エコラリア | | - | 2 | 2 | 3 |
| 絶え間ない質問 | 会話ターン充足機能群 | 10 | 2 | 9 | 10 |

注1. “母数”は、各種類・各機能群を生起している（していた）対象児のべ人数。

注2. 同一の参加者が特定の機能群に対して“置換・軽減”と“コミュニケーション”の両方について述べた場合は、重複して集計している

注3. “意味づけあり”の（ ）内の数字は、意味づけを行っていないと評定された数を示す

3. 2 各機能群に対する応答方略

各種類・各機能群に対する保護者の応答方略について、Table 3に示した。それによると、全体として、非慣用的言語行動がコミュニケーションの手段として利用されていることが示された。ただし、その中でも、【遅延性エコラリア—焦点不定群】に対しては、抑制・軽減を行うという回答をした保護者が他の機能群に比べて多い傾向を示した。

3. 3 各事例からみた非慣用的言語行動の理解

方法で述べた通り、(1) 非慣用的言語行動の発達段階と、(2) 生活年齢の高低という2つの視点から4事例を選択した。4事例の詳細については、以下の通りである。

(1) 非慣用的言語行動の発達段階による2事例

〈A児(生活年齢=11歳2ヶ月、知能指数=28)—非慣用的言語行動を多用している段階の事例〉

A児の保護者が回答した非慣用的言語行動への意味づけと応答方略については、Table 4に示した。A児の事例についての概要は以下のとおりである。

A児の保護者の特徴は、【遅延性エコラリア—焦点不定群】と【絶え間ない質問—会話ターン充足機能群】の発話内容に示されているように（たとえば「私としては、(子どもから言葉が返ってくるのが嬉しいですね)、非慣用的言語行動を利用して子どもとのやりとりを楽しんでいることに言及している点である。さらに、このようなやりとりをすることによって、「指示が入っていきやすいですね。要求も言ってくるようになるし、落ち着きますよね生活が。」と述べているように、言葉のやりとりで遊ぶことが、他のコミュニケーション行動や生活全体に影響を与えていることについて述べていた。

また、【即時性エコラリアー意図伝達機能群】の発話内容に示されたように、他者の言葉に
 応答するということが自体が小さい頃から無かったため、オウム返しでも良いので応答してくる
 ことが自体が目標であると述べていた。

保護者は応答方略としては、非慣用的言語行動をコミュニケーション手段として利用するこ
 とを主としているが、【遅延性エコラリアー焦点不定群】については、バスの中といった公共の
 場所では、抑制する必要があるということについて言及していた。

Table 4 A児の事例 (IQが低い事例)

| 種類 | 機能群 | 応答方略 | | 保護者の発話内容 |
|--------------|----------------|-------|---------------|--|
| | | 置換・軽減 | コミュニ ケーション | |
| 遅延性 エコラリア | 焦点不定群 | ○ | ○ | 〈どのように返していますか?〉(映画を)「見に行こうか」と誘ってみたり、そうすると、「見ません」と言うんですね。〈止めさせようとするのは?〉もちろん、バスの中であまりにも(映画の台詞を)言っている時は、静かにしようねということには言っています。〈家の中では?〉会話を楽しんでいます。 |
| 即時性 エコラリア | 会話ターン 充足機能群 | | ○ | 〈どういう意味があるのでしょうか?〉なにかしら言わないといけない、リズムで返しているだけ。返答は分からないけど、同じ言葉で返しているんじゃないかと、思いたい。〈どのように返しますか?〉「何で遊んだの?」などであれば、「外遊びしたのかな?」とか、(具体的に示していく)そうすると、意外に(言葉が)返ってくるがありますね。 |
| 即時性 エコラリア | 意図伝達 機能群 | | ○ | 〈どのように返しますか?〉(「食べる?」にオウム返しされた時)「食べたいの?」「今食べるの?」とか聞きますね。〈「はい」っていうんだよと教えるとか〉そういうことはしなくてすね。〈それはなぜですか?〉彼にしたら通じているわけですよ。今、こういうんですけど(言葉がオウム返しになっているということ)、小さい頃からそれをもとめてきたんですよ、私としては。「食べる?」と言ったら、「食べる?」と帰ってくるといった充実感というのが今はあるんです。だから、あえてそれに対して求めていわせようだとか、こういう言葉を期待しているだとか、そういうことはないですね。 |
| 絶え間ない 質問 | 会話ターン 充足機能群 | | ○ | 〈意味はなんですか?〉あてっこのやりとりなんですよ。ね。(母が)楽しいんですよ。ね。(子どもの)好きな世界に(母が)入っているんですよ。ね。OKが出ているんですよ。ね。〈どのように返すのでしょうか?〉遊んでいるんですよ。子どもと。親子の会話ですよ。ね。(昔から)とにかく、(言葉が)返ってきてほしかったので、夢中だったんですよ。彼の引き込むというか、仲間にする、(母の方に)振り向かせるためのきっかけは、もう四方八方から(探った)。どっかにある入り口を探していたという感じがあるので。〈こういう遊びが出てくるとどのように変わったのでしょうか?〉指示が入っていきやすいですよ。ね。要求も言うようになるし、落ち着きますよ。ね生活が。 |

注1. 保護者の発言内容の〈 〉は、調査者の発話

注2. 太字・ゴシックは、結果と考察で言及している箇所

〈K児(生活年齢=13歳8ヶ月、知能指数=89)一通常言語を中心に利用している段階の事例〉

K児の保護者が回答した非慣用的言語行動への意味づけと応答方略については、Table 5に示した。K児の事例についての概要は以下のとおりである。

K児の保護者の特徴は、【遅延性エコラリアー会話ターン充足機能群】や【絶え間ない質問ー会話ターン充足機能群】の発話を子どもがコミュニケーションをとろうとしているサインとして捉えており、「一種の遊びみたいになっているので」と述べているように、言葉のやりとりを通した遊びを積極的に行っていた。その背景には、できるだけ言葉を覚えてもらいたいという保護者の考えがあった。

【遅延性エコラリアー焦点不定群】に関しては、「人前でやると頭おかしい子と思われるから」といったように、社会的な場では抑制することを述べている。そして、「家では良いけど、外ではそれをしないでね」と述べているように、場所を限定するという対応をしているとのことであった。さらに、低学年の時はK児の発話を許していたが、高学年になってから抑制することを行うようになってきたという年齢による対応の差について言及していた。

Table 5 K児の事例 (IQが高い事例)

| 種類 | 機能群 | 応答方略 | | 保護者の発話内容 |
|--------------|----------------|-------|-----------|---|
| | | 置換・軽減 | コミュニケーション | |
| 遅延性 エコラリア | 焦点不定群 | ○ | ○ | 〈どういう意味があると思いますでしょうか？〉やっぱり、言葉の響きとかが面白かったのかなあ。〈どのように返しますか？〉低学年の時は黙ってしゃべらせていたんですけど、高学年になってアスペルガーが分かってから、そういうことを人前でやると頭おかしい子と思われるから、「家では良いけど、外ではそれをしないでね」と言っていました。 |
| 即時性 エコラリア | 会話ターン 充足機能群 | | ○ | 〈どのように返したでしょうか？〉(何で遊ぶかということについて) ブランコにする？ すべり台にする？ というふうに選択肢を与えて、選んでもらうという感じですね。〈「はい」と教えたりはしないんですか？〉しなかったと思いますね。〈それは何ですかね？〉なんですかね。 |
| 遅延性 エコラリア | 会話ターン 充足機能群 | | ○ | (意味について) 言葉のやりとりを楽しんでいる。一種の遊びだと思っているのかなあ。〈なぜ、そのように返すのでしょうか？〉本人にとっては遊びなんだろうなと思ってやっていたので。とにかく、言葉を色々覚えて欲しいというのがあったので。 |
| 即時性 エコラリア | 意図伝達 機能群 | | ○ | 〈どのように返しているのでしょうか？〉「何食べる？」と言うと、「何食べる？」と言うから、応えられないから、その時に「ポテトチップスあるよ」と言う、「ポテトチップス」と言うから、それをあげるという感じですかね。 |
| 絶え間ない 質問 | 会話ターン 充足機能群 | | ○ | 〈どういう意味があるんでしょうか？〉(子どもが母と) コミュニケーションをとりたいというのがあるんじゃないでしょうか。かまってほしいとか、そういう時に出てくる。(母が応答するのは) 本人がコミュニケーションをとりたいと思っているので。〈なぜ返すのでしょうか？〉一種の遊びみたいになっているので。 |

注1. 保護者の発言内容の〈 〉は、調査者の発話

注2. 太字・ゴシックは、結果と考察で言及している箇所

(2) 生活年齢の高低による2事例

〈E児（生活年齢＝6歳4ヶ月、知能指数＝54）—生活年齢が低い事例〉

E児の保護者が回答した非慣用的言語行動への意味づけと応答方略については、Table 6に示した。E児の事例についての概要は以下のとおりである。

E児の保護者の特徴は、【遅延性エコラリア—会話ターン充足機能群】や【絶え間ない質問—会話ターン充足機能群】についての発話内容に示されているように、抑制することに関連した言及が見られたことである。特に、「こだわりになるかなと思ったので」と述べているように、非慣用的言語行動を保持し続けることに対する否定的な考えを持っていた。

また、もう一つの特徴は、将来の発達を踏まえた言及があったことである。【即時性エコラリア—会話ターン充足機能群】では、置換する必要性について「まだ、こっちもそこまで要求するのはというのがあるんですね。」ということや、上述のとおり【遅延性エコラリア—会話ターン充足機能群】がこだわりになるといった言及であった。

Table 6 E児の事例（CAが低い事例）

| 種類 | 機能群 | 応答方略 | | 保護者の発話内容 |
|--------------|----------------|-------|-----------|--|
| | | 置換・軽減 | コミュニケーション | |
| 遅延性 エコラリア | 焦点不定群 | | | 〈どういう意味がありますか?〉彼の中での想像遊びだと思うんですけど。(応答について)人によっては独り言をストップさせるというお母さんもいると思うんですけど、Y先生(医師)からも、ここではというところでは許してあげたらって言われていたので、親としてはストップさせないでそのままにしていますね。 |
| 即時性 エコラリア | 会話ターン 充足機能群 | | ○ | 〈どういう意味があると思いますか?〉外国語で言われた時に、なんて言ったの?と返すような感じがな。〈どのように返しますか?〉こっちが誘いかけたときは、じゃあこれやろうよと強引に誘いかけたりですね。〈他の言葉に置き換えたりするということはしないのですか?〉まだ、こっちもそこまで要求するのはというのがあるんですね。手を出してくるとかで(行動で示すということ)、今のところは良しとおこうかな。 |
| 遅延性 エコラリア | 会話ターン 充足機能群 | ○ | | 〈どういう意味があると思いますか?〉自分の知っている言葉で相手の反応を求めたいとか。(応答について)本人はまだやりたいですけど、私が拒絶しています。言葉が入るようになった年中とか5歳半ぐらいで、こっちも楽しかったのですが、逆にこれはこだわりになるかなと思ったので、それ以降はこっちがストップしているという状態ですね。いつも会っている人なら分かっても、会っていない人だと理解できない行動なので。 |
| 即時性 エコラリア | 意図伝達 機能群 | | ○ | 〈どのように返していますか?〉態度を見て、やる気満々だと体がついてくるので、やってみてと言いますね。 |
| 絶え間ない 質問 | 会話ターン 充足機能群 | ○ | | 〈どういう意味があるとお考えでしょうか?〉好きなことを発信しているのかなあと。たぶん、考えていることをまだ頭の中に取まっていなくて、出てきているのかなあと。〈どういうふうに戻しているのでしょうか?〉基本的には無視しています。とりあえず、静かに見えていますけど。 |

注1. 保護者の発言内容の〈 〉は、調査者の発話

注2. 太字・ゴシックは、結果と考察で言及している箇所

〈D児（生活年齢＝13歳0ヶ月、知能指数＝54）—生活年齢が高い事例〉

D児の保護者が回答した非慣用的言語行動への意味づけと応答方略については、Table 7に示した。D児の事例についての概要は以下のとおりである。

D児の保護者は、【遅延性エコラリア-会話ターン充足機能群】について年齢との関連で対応

Table 7 D児の事例（CAが高い事例）

| 種類 | 機能群 | 応答方略 | | 保護者の発話内容 |
|--------------|----------------|-------|-----------|--|
| | | 置換・軽減 | コミュニケーション | |
| 遅延性 エコラリア | 焦点不定群 | | | 〈意味はなんですか？〉うちの場合は、とにかく現実逃避じゃないですけど、自分の世界に入りたい時だったりとか、空想の世界に入ったりするんですね。〈どのように返しますか？〉本人が空想の世界に行き過ぎている時は、そのままにしていました。無理に止めさせることはしなかったですね。 |
| 即時性 エコラリア | 会話ターン 充足機能群 | | ○ | 〈意味はなんですか？〉私は音だけ聞いているという印象ですね。音として入って復唱しているだけ。〈どう返しますでしょうか？〉もうちょっと本人の理解できる言葉に変えるとか、もう少し注意をひきつけて入れるというのがありますよね。 |
| 遅延性 エコラリア | 会話ターン 充足機能群 | ○ | ○ | 〈意味はなんですか？〉自分の言っただけの言葉を言ってもらうために言っているだけという気もするので、遊び的な感覚という気がします。〈どういよう返しているんでしょうか？〉できる範囲で返していました。でも、年齢が上がってくると、今言う場面じゃないと、後でしょうねとか、今はしませんとか、そういうことを言うようにしました。 |
| 即時性 エコラリア | 認知機能群 | | | 〈どういう意味があると思いますか？〉自分の行動を言うことで調整している気がするんですよ。言われていることは分かっているわけですから。〈どのように返しますか？〉やることはできるので、（行動自体を）ほめてあげることが多かったですよ。 |
| 遅延性 エコラリア | 認知機能群 | | ○ | 〈意味は？〉（【即時性エコラリア-認知機能群】と）同じですね。〈応えは？〉間違っていなければ、「そうだね」とか言ってあげますね。 |
| 即時性 エコラリア | 意図伝達 機能群 | | ○ | 〈どのように返しますでしょうか？〉「たべようね」とか「おいしそうだね」とか本人の言葉を（母親が）言い換えるということ、本人の言うような言葉を言ってあげるということですね。〈正しい言葉に言い直させるという事は？〉しないです。発音はしますが。〈それはなぜでしょうか？〉基本的には人に通じれば良いかなという考えです。あの子なりの伝え方というか、使い方というのは、子どもそれぞれに特徴があって良いと思うので、周りがそれを理解できる手がかりがあれば十分だと思うんですよ。 |
| 遅延性 エコラリア | 意図伝達 機能群 | | ○ | 〈どのように返すようにしていましたでしょうか？〉（魚を食べる場面の話について）「お魚頑張って食べようね」とか「あとちょっとだよ」とかおだてますね。 |
| 絶え間ない 質問 | 会話ターン 充足機能群 | ○ | ○ | 〈意味は？〉遊びの要素が多い気がします。〈どのように返していましたでしょうか？〉（【遅延性エコラリア-会話ターン充足機能群】と）同じように返していましたね。こういう聞き方をするのは、小学校に入ってからです、今はダメとかも言っていました。 |

注1. 保護者の発話内容の〈 〉は、調査者の発話

注2. 太字・ゴシックは、結果と考察で言及している箇所

が異なってくるという言及をしていた。それは、「年齢が上がってくると、今言う場面じゃないと、後でしょうねとか、今はしませんとか、そういうことを言うようになりました」と述べているように、年齢が高くなると非慣用的言語行動を抑制する場面が増えてきたことであった。

また、【即時性エコラリア—意図伝達機能群】に関して置換して抑制することに関する言及をしていた。D児の保護者は、この機能群に関して抑制する必要性を感じていなかったが、その理由は、「基本的には人に通じれば良いかなという考えです」「周りがそれを理解できる手がかかりがあれば十分」という発話内容が示しているように、周囲の他者が理解することによって、コミュニケーションをとることができることが目標であるという考えを持っていることが示された。

4. 考察

4. 1 保護者の非慣用的言語行動に対する意味づけ

Table 3に示されたように、ほとんどの種類・機能群の非慣用的言語行動に対して、保護者は意味を付与していた。エコラリアは、意味のない繰り返しであると定義していた研究もあるが(Howlin, 1982など)、少なくとも保護者は、意味がないとは考えていないことが明らかとなった。

保護者は、ほとんどの非慣用的言語行動に意味を見出す一方、【遅延性エコラリア—焦点不定群】に関しては、9名中3名が、意味がないと回答をしていた。【遅延性エコラリア—焦点不定群】は、CMの台詞を独り言のようにつぶやくといった発話であるが、発話内容を推測できる非言語的な行動を伴わない場合が多いため、意味がないと理解されると考えられた。保護者にとって【遅延性エコラリア—焦点不定群】を理解することは、他の機能群に比べて比較的困難である可能性が示唆された。

4. 2 非慣用的言語行動の発達段階に伴う保護者の対応

非慣用的言語行動の発達段階としては、初期発達に位置づけられるA児は、知的機能が低く、非慣用的言語行動を消失することなく保持し続けている事例であった。保護者は本児の発達課題として、对人的相互反応の促進が重要であり、それに基づいて非慣用的言語行動に対応する必要性を指摘していた。

A児の保護者は【即時性エコラリア—意図伝達機能群】について、A児が他者からの質問などに対して必ずしも通常言語で応答する必要性がないことについて言及していた。むしろ、非慣用的言語行動の形式であっても、その意味を保護者が理解できれば良いと考えていた。「(子どもからの応答が)返ってくるといった充実感というのが今はあるんです」と述べているように、A児とコミュニケーションをとれることに重点が置かれていたためであった。A児の保護者の場合、このようなコミュニケーションをとること自体を目的として非慣用的言語行動を手段として利用するという考え方が、【遅延性エコラリア—焦点不定群】【絶え間ない質問—会話

ターン充足機能群】においても明確であった。

保護者がこのような考えをもつ背景には、自閉性障害児の発達段階との関連があると考えられる。それは、A児のように比較的初期発達段階の子どもの場合、山上（1999）も指摘しているように、視線が合わない、やりとりが成立せず一人遊びが多いなど、対人的相互反応の困難さが顕著になる。この段階の子どもは、言語を介してやりとりを行うということより、他者を指向することが課題となる。つまり、通常言語のような適切な言葉を用いて他者とやりとりをするということが発達課題となるのではなく、その基礎となる対人的相互反応の促進が発達課題となる。A児の保護者が、先述のように非慣用的言語行動であっても、そのやりとりに充実感をもっているということは、非慣用的言語行動を利用しながら、A児の発達課題である対人的相互反応の促進を行うことができていると感じているからであることが示唆される。

次に、知的機能が高く、非慣用的言語行動の発達段階もA児とは異なるK児についてである。K児の場合、通常言語を中心とした発話である一方、【絶え間ない質問—会話ターン充足機能群】のみが生起していた。保護者は【遅延性エコラリア—会話ターン充足機能群】について、「言葉のやりとりを楽しんでいる。一種の遊びだと思っているのかなあ。（中略）本人にとっては遊びなんだろうなと思ってやっていましたね。とにかく、言葉を色々覚えて欲しいというのがあったので。」と述べているように、CMの台詞を題材として子どもとやりとりを楽しむ会話を行っていたことを述べている。さらに、【遅延性エコラリア—焦点不定群】【絶え間ない質問—会話ターン充足機能群】でも同様の点を指摘しており、一見すると無意味とも感じられる非慣用的言語行動を通して子どもとやりとりをすることに積極的な意味を見出していたと考えられる。

このように、A児とK児の事例では、発達段階は異なっている、自閉性障害には対人的相互反応の質的障害を伴うという共通点があるため、非慣用的言語行動の利用を端緒として子どもとの関わりが展開されていた。すなわち、非慣用的言語行動の発達段階に関わらず、保護者は非慣用的言語行動を利用した関わりの有効性を認識して、積極的にコミュニケーション手段として利用していることが明らかとなった。

4. 3 生活年齢による保護者のニーズの差異

生活年齢の高いD児の事例からは、生活年齢が上がると非慣用的言語行動を抑制する場面が出てくることが述べられていた。保護者は、「年齢が上がってくると、今言う場面じゃないと、後でしょうねとか、今はしませんとか、そういうことを言うようにしました。」と述べているように、生活年齢と保護者の対応に関連があることについて言及していた。この点については、D児だけではなく、A児やK児といった生活年齢が高い事例に共通してみられており、社会生活の中で、CMの台詞を介したやりとりをすることなどは、周囲から奇異に映るため、そのようなやりとりを抑制しなくてはならないと保護者が感じていることを示していた。このことから、社会的場面との関連から非慣用的言語行動を抑制する必要があると保護者が考えているこ

とが明らかとなった。すなわち、生活年齢が高い子どもに対しては、無条件で非慣用的言語行動を介したコミュニケーションを行うのではなく、E児やK児の保護者が述べているように、場所を特定することなどが、自閉性障害児と保護者が生活していくためには必要であると考えられた。

生活年齢が低いE児の事例からは、非慣用的言語行動の発達段階を踏まえた保護者支援を行うことの必要性が考えられた。E児は、保護者が診断名の告知を受けてから比較的年数の短い事例であった。E児の保護者は【即時性エコラリア—会話ターン充足機能群】について、「(他の言葉に置き換えることをしないかについて) まだ、こっちもそこまで要求するのはというのがあるんですね。」という点や、【遅延性エコラリア—会話ターン充足機能群】について「(子どもの好きな文句を利用したやりとりをしていることについて) 逆にこれはこだわりになるかなと思ったので」という点を述べているように、非慣用的言語行動の将来的な発達を踏まえての発言が特徴的であった。

将来的な発達を踏まえての発言は、E児に比べて生活年齢が高いA児やK児、D児などでは見られなかった。【遅延性エコラリア—会話ターン充足機能群】の発話を介したやりとりがこだわりになるのではないかという保護者の発言からも明らかのように、現在行っているやりとりが将来的には問題と感じられるような行動になるのではないかという保護者の不安が背景にあると考えられた。このことから、特にE児のような生活年齢が低く、非慣用的言語行動の発達も初期段階にある自閉性障害児の保護者に対しては、非慣用的言語行動が発達的にどのような過程をたどるのか、そして、それを見越してどのような対応が求められるのかということを伝えることが、保護者支援として必要であると考えられた。

5. 本研究のまとめ

本研究では、非慣用的言語行動の各機能群に対して、①保護者は意味づけを行っているか、②どのような応答方略で関わっているかという点を検討した結果、以下の3点が明らかとなった。

第一は、非慣用的言語行動の発達段階に関わらず、非慣用的言語行動を利用して対人的相互反応の促進を図ることにに関して保護者が意義を見出していることであった。保護者は、非慣用的言語行動を自閉性障害児とのコミュニケーション手段として利用することを経験的に理解していた点が明らかとなった。

第二に、生活年齢との関連を検討した結果、非慣用的言語行動を利用して他者と関わるという場合、社会的状況によっては、不適切な場面もあり、非慣用的言語行動を抑制する必要がある場面を保護者が感じているという点であった。無条件で非慣用的言語行動をコミュニケーション手段として利用するのではなく、年齢に応じて抑制することも必要になるという点が明らかとなった。

第三は、非慣用的言語行動を多用する自閉性障害児を育てる保護者を支援する際、特に子ども

もの生活年齢が低く、非慣用的言語行動の初期発達段階にある自閉性障害児の保護者にとっては、発達的な見通しを持つことが重要であるということであった。このような知見は、Prizantら（2006）のサーツモデルにおける交流支援（transactional support）にもつながるものであり、保護者支援の視点となるであろう。

一方で、本研究で残された課題は、非慣用的言語行動に対して関わり手がどのような理解を経て、自閉性障害児との積極的なコミュニケーション手段として位置づけていくのかという点の検討である。診断告知を受けて間もない保護者の支援を考える上で重要な課題であると考えられた。

【引用文献】

- American Psychiatric Association. (2002). *DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引*. American Psychiatric Association.
- Hirosawa, M., & Tanaka, M. (2008). Development of Unconventional Verbal Behavior in Children with Pervasive Developmental Disorders: Focus on Functions of Unconventional Verbal Behavior. *The Japanese Journal of Special Education*, 45, 513-526.
- Howlin, P. (1982). Echolalic and spontaneous phrase speech in autistic children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 23, 281-293.
- 神野幸雄. (2004). 自閉症スペクトラムの子どもの早期支援と親への支援. 小山正・神土陽子（編）, *自閉症スペクトラムの子どもの言語・象徴機能の発達* (pp.160-184). ナカニシヤ出版.
- 金子久江. (2004). コミュニケーションとしての言語. 小山正・神土陽子（編）, *自閉症スペクトラムの子どもの言語・象徴機能の発達* (pp.121-159). ナカニシヤ出版.
- Kanner, L. (1943). Autistic disturbance of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250.
- Prizant, B. M., Wetherby, A. M., Rubin, E., Laurent, A. G., & Rydell, P. J. (2006). *The SCERTS Model: A comprehensive educational approach for children with autism spectrum disorders*. Paul. H. Brookes.
- Prizant, B. M., & Duchan, J. F. (1981). The functions of immediate echolalia in autistic children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 46, 241-249.
- Prizant, B. M., & Rydell, P. J. (1984). Analysis of functions of delayed echolalia in autistic children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 27, 183-192.
- Prizant, B. M., & Rydell, P. J. (1993). *Assessment and intervention considerations for unconventional verbal behavior*. In J. Reichle, & D. Wacker (Eds.), *Communicative alternatives to challenging behavior: Integrating functional assessment and intervention strategies*. Vol.3. Communication and language intervention series. Emerson Coll.
- Rydell, P. J., & Mirenda, P. (1994). Effects of high and low constraint utterances on the production of immediate and delayed echolalia in young children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 24, 719-735.
- 佐藤友紀. (2005). 自閉症児の言語発達に関する心理臨床的アプローチ—エコラリアとコミュニケーションの発達過程の分析—. 平成16年度淑徳大学卒業論文.
- 山上雅子. (1999). *自閉症児の初期発達—発達臨床的理解と援助—*. ミネルヴァ書房.

謝辞

本研究にご協力をいただきました保護者の皆さまに深く感謝申し上げます。また、本研究のご指導をいただきました東北大学大学院教育学研究科田中真理教授に謝意を表します。

付記

本研究は平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（A））「障害児・者の生涯発達に関わる臨床心理学的援助システムとネットワークの開発」（課題番号：17203040 研究代表者：針塚進）の補助を受けた。

（平成24年11月9日受理）